

早稲田大学 福島社会イノベーション創造事業

早稲田大学環境総合研究センター ふくしま広野未来創造リサーチセンター

松岡俊二*、永井祐二**、李洸昊***、山田美香**、中野健太郎**、朱鈺*

*早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科、**早稲田大学環境総合研究センター、***早稲田大学大学院 環境・エネルギー研究科

事業概要

社会変革のトリガーとなる「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想）」の実装を通じて、原子力災害からの地域の創造的復興と持続可能な社会形成を実現する。高大連携と大学間連携により、復興知における社会イノベーション分野の研究拠点を形成し、調査研究や対話の場を活用した人材育成を実施する。



定期的な連携協議の実施
コロナ禍においても一層の連携を深めている

市町村/各種団体との連携体制の構築

- ・ 広野町とともに浜通りにおける長期的・広域的観点からの復興の横展開・連携
- ・ 双葉地方町村会および被災15市町村などの周辺地方自治体との連携
- ・ 研究会メンバーの所属機関やふたば未来学園、地域団体との連携
- ・ 復興庁福島再生総局、経済産業省資源エネルギー庁などの連携

早稲田大学ふくしま広野 未来創造リサーチセンター

広野町 大学連携協議会

広野町に拠点を置く大学の交流による、相互連携の可能性を探り、広野町とともに浜通りの連携関係の構築を目指す。

1F廃炉の先研究会

福島第一原発（1F）の廃炉事業のあり方や1F廃炉の将来像を、廃炉プロセスの地域資源化や「復興と廃炉の両立」という視点から考える。

国際芸術・学術拠点構想 （A&S）研究会

福島の教訓を未来世代へ発展的に継承し、地域を新たな文化創造と文化発信の拠点として再生するため、国際芸術・学術（Arts & Sciences）拠点の形成を考える。

創造的復興研究会

2050年に原子力災害からの福島復興の象徴として、福島第一原発の世界遺産登録を行うことを社会目標として掲げ、調査研究を実施する。

ふくしま学（楽）会

多様な専門家（行政も含め）と多様な市民（住民）による「対話の場」の構築、専門知と地域知の出会いを創出する。本年度より、東京電力とマスコミが正式に参加し、積極的な議論を行う。

ふくしま浜通り 社会イノベーション・ イニシアティブ構想

地域探究研究

ふたば未来学園

ふるさと創造学

地域小中高

エコミュージアム

地域のさまざまな記憶・伝承資源や地域活動をつなぎ、地域の一貫した学びに活かし、世界に発信する。

日本原子力学会

資源エネルギー庁

電力中央研究所

東京電力

三菱総合研究所

同志社大学

東京大学・檜葉

京都大学

福島高専

人と防災未来センター

明治大学

兵庫県立大学

国立環境研究所

ふたば未来学園

未来会議

NPO法人ザ・ビーブル

磐城高校・学生

福島県企画調整部

復興庁

東日本大震災・原子力災害伝承館

HAMADORI13

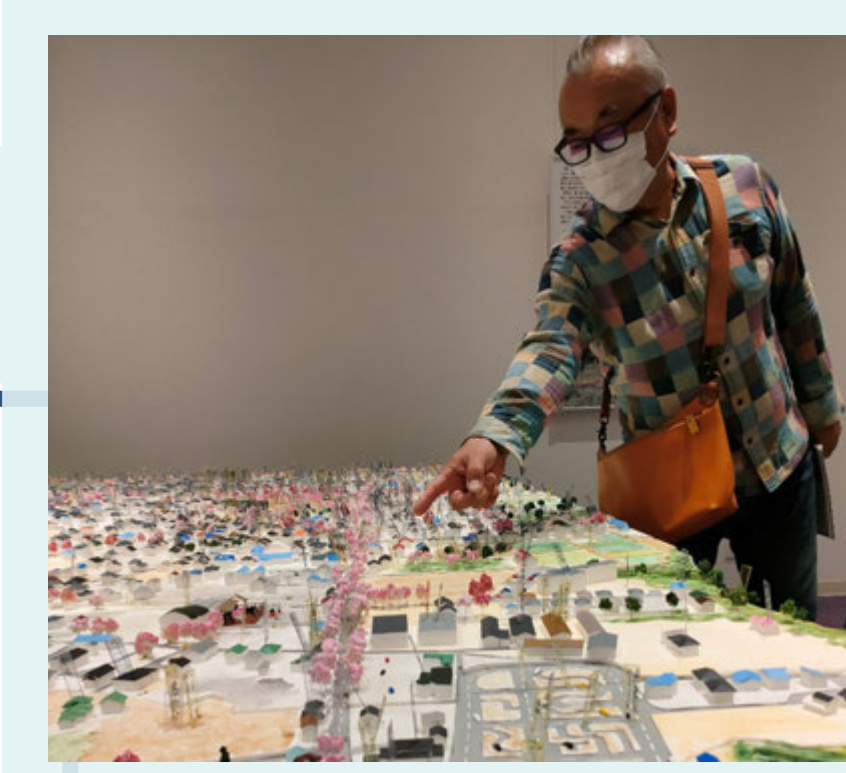
専門知

境界知

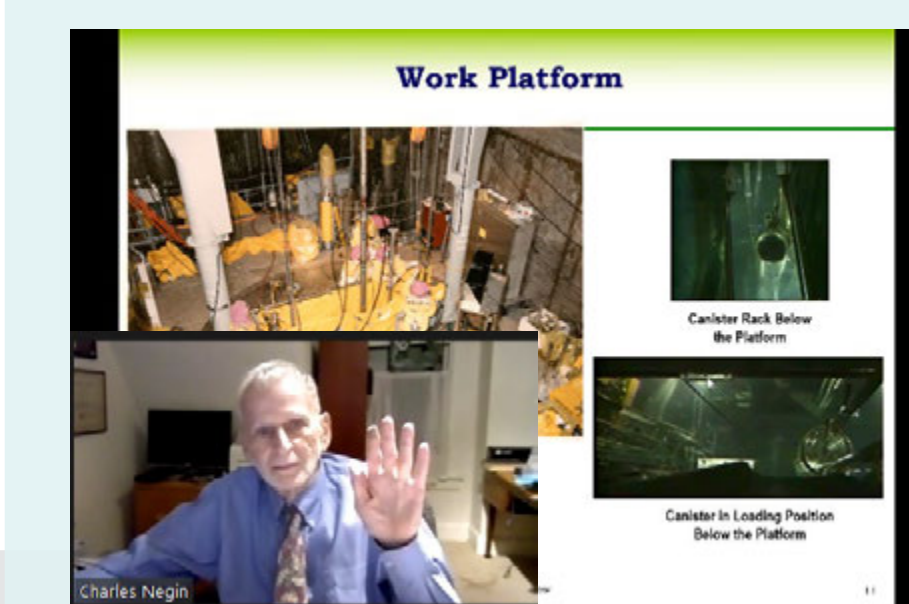
地域知



地域住民、高校生、公的機関、複数大学の参加による
多様な主体、多様な世代との対話を実践している



博物館・ミュージアム施設の調査
地域の招聘研究員との連携事業として行った



海外の専門家を招いての研究会
他事例の比較から1F廃炉課題を読み解いた

今年度の具体的な活動内容

1F廃炉の先研究会

- 21年5月13日：第13回「1F廃炉における『デブリ取り出し』と安全性評価を考える」
- 21年6月14日：第14回「1F廃炉と『デブリ取り出し』を考える」
- 21年7月14日：第15回「1F廃炉事業の進め方を考える：燃料デブリ取り出し及び人材育成を中心に」
- 21年9月6日：「TMI-2勉強会」
- 21年9月24日：第16回「スリーマイル島原子力発電所の事故処理について：燃料デブリ取り出しと廃棄物管理」

- 1F廃炉プロセスを技術的・社会的観点から総合的に検討する場
- 「社会のなかの廃炉」あるいは「地域のなかの廃炉」というアプローチによる「場」づくりの重要性

A & S 研究会

- 21年7月4日：シンポジウム「福島復興と国際教育研究拠点に関する地域対話」
- 21年7月30日：第1回地域社会と伝承館との「対話の場」の形成に関する検討グループ打合せ
- 21年9月24日：第2回地域社会と伝承館との「対話の場」の形成に関する検討グループ打合せ
- 21年10月11日、11月23日～25日：エコミュージアム予備調査

- 地域社会メンバー（地域知）と専門家（専門知）との双方向の噛み合った「対話の場」の形成
- 「エコミュージアム構想」の福島（浜通り地域）における具体化（マスタープランづくり）を検討し、伝承館の位置と役割を調査研究

創造的復興研究会

- 21年7月8日：全体会 第1回「2050年の福島浜通り地域社会の将来像を考える」
- 21年8月2日：WG1 第1回会合「2050年の福島浜通りの産業・人口・地域像を考える」
- 21年8月3日：WG2 第1回会合「2050年に原子力災害からの地域復興の象徴として1Fの世界遺産（文化遺産）登録を行う」
- 21年9月16日：WG1 第2回会合「2050年の福島浜通りの産業・人口・地域像を考える」
- 21年11月14日：シンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F廃炉の将来像を考える」

- 原子力災害から何を将来世代へ伝承するのか、何を事故の教訓として防災知識や災害文化とするのか、事故からどのような社会的価値を形成するのかなどを考えていくことの重要性
- 災害や事故からの地域社会の復興過程から、新たな社会の物語を紡ぎだし、地域資源を有効活用したビジネスクラスター形成による多様な交流人口や関係人口を生み出していくことの重要性

対話の場

- 21年7月25日：第8回ふくしま学（楽）会
- 21年11月21日～23日：福島浜通り復興研究ワークショップ
- 対話を通じた新しい関係の創出、教訓の言語化を試行、人材育成カリキュラムの構築

社会イノベーション系 復興知大学連携

1 高大連携による 人材地域還流 ロールモデル構築

近畿大学

福島高専

東京大学

東日本国際大

早稲田大学

兵庫県立大

2 地域の多様な 主体の共創 学びの場構築

3 地域外学生が 福島から学ぶ カリキュラム構築

5年間の人材育成目標

福島の教訓を踏まえて、継続的に福島の課題を「自分ごと」ととらえ、科学技術と社会の関わりについてのイノベーションを起こす人材を育成する。

①～③のカリキュラム連携により、一貫した“ふるさと創造”への思いを持続的な学びに活かすプラットフォームを構築する。



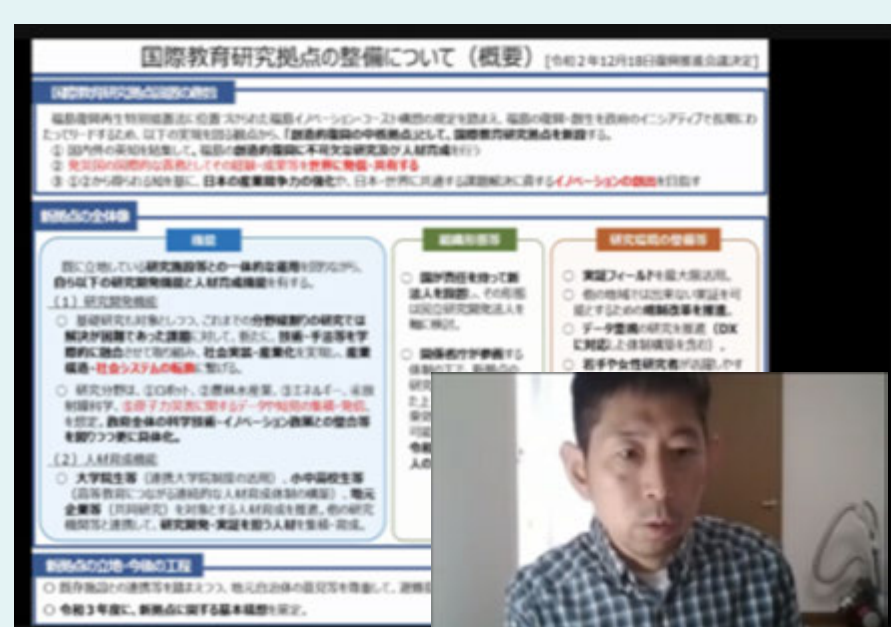
福島に関する特別授業の実施を通じて関心層を発掘
現地視察、対話の場への参加を企画している

事業実施上の課題

- ・ コロナ感染症の影響で、計画していた現地での研究調査、地域演習の実施が困難であったが、積極的なWebを活用した代替措置を講じている。
- ・ ただし、地域主体との関係構築が、一度も会わないままで行われていることに限界を感じている。

2年目の事業内容及び取組の方向性

- ・ 多様な専門家や多様な地域社会の方々との「対話の場」の継続的な展開
- ・ 「デブリ取り出しと1F廃炉の将来像に関する選択肢の中間まとめ」の作成
- ・ 福島（浜通り地域）における「エコミュージアム構想」の具体化（マスタープランづくり）
- ・ 「2050年の福島浜通りの将来ビジョン」の具体化
- ・ ①～③の教育体制の構築とこれをつなぐロールモデルの実践



高校生はじめ地域住民と復興担当者らが対話
国際教育研究拠点のあるべき姿を議論した